
始まりはダンジョン(仮)

さくさく

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

始まりはダンジョン（仮）

【Nコード】

N6286Z

【作者名】

さくさく

【あらすじ】

ある世界の大陸にひっそりと存在する名もなき小さな洞窟。

3人の男女がある任務を受けてその洞窟を探索することになった。

序章（前書き）

この小説を読んでくださる方へ

この小説は私が初めて書くものであり稚拙な文章であるかと思ひます。

それ故に、1人の小説家　そう書いてしまつのもおこがましいかと思ひますが　として、やってはいけない間違いがあるかも知れませんが。そう言つた間違いを指摘してくだされば、作者は喜びで胸がいっぱいになります。

感想、誤字の指摘や脱字、またはこの書き方はおかしい、ここはこうした方が伝わりやすいのではないかと言つたアドバイスをくだされば、作者は心が踊りむせび泣きます。

誹謗・中傷・叩きといったモノを書かれると、作者はその悔しさをバネに高く跳ね上がろうとします。

未永く私の書く小説にお付き合いしてくだされば幸いです。

序章

この世で始めに生まれた人。

自然とともに生きる人。

小さき人。

誇り高く生きる人。

魔の法則を使役する人。

過去にいた魔王の残骸物。

魔力を帯びた獣。

この世界には多種多様な種族が笑い、悲しみ、愛を育み、生まれ、死を繰り返し返している。

この世界の大部分を占め、中央に位置する大陸、ここは最も広く、最も過酷で、最も人が繁栄した大陸、クツビ大陸。

このクツビ大陸の遥か西に位置する、名もなき小さな洞窟。

ここからこの物語は始まる。

第1章第1話

ネズミの鳴き声、物が崩れるような音、何かが這うような音、心が不安になりそうな唸り声、そして

悲鳴。

生きた人の呼吸する音が聞こえる。それも抑えたような、小さく息をしている。

その小さな息遣いすらも聞かれてはいけない、とでも言いたげにさらに息を殺していく。

無音。何も聞こえず、だがさらに待つ。

待つ。

待つ。

「……………行つたか」

通路側にいる男が小さく声を出す。

「はぁー…」

その男の隣を伺っていた短髪の女が腰を下ろしつつ息を吐く。

さらにその隣にいる杖をついた大柄な男がその様子を見ながら喋る。

「まだ緊張を解くな、警戒を怠るんじゃない」

「そんなこと言っただって、このまま警戒していても体力消耗するだけでしょ？」

短髪の女は座ったまま腰に下げた袋から小さな茶色い塊のようなものを取り出して言う。

「それにあたしの代わりにレオンがその間に警戒してるからいいしょー」

「俺も休みたいんだが…」

通路を警戒し横目に見ながら苦笑する。

「ほれみろ」

大柄な男は杖を左手に持ち替えながら話す。

「次はお前だ、レオンと代わってやれ」

「座ったばかりなのにー」

小さな茶色い塊を口に入れながら軽く悪態を付き、見張りを交代する。

「しっかしさっきのモンスターはなんなんだ？」

「さてな…」

見張りを交代した男　レオン　と大柄な男が話を交わす。

「魔物だったりして」

短髪の女は通路を見ながらそう言った。

「お前はもつと周囲を警戒しろ」

「まあまあカール、さっきの奴を気にせず見張りだけをやれって言う方が酷なものだって」

大柄な男　カール　を諷めながらレオンは喋り続ける。

「それに話しながら見張りをやればいい話じゃないか」

「……………」

カールは不機嫌そうに黙っている。

それを見たレオンは焦ったように話す。

「ここで言い争いしてもしょうがないだろ？そんなことよりもさっき見た、骸骨のモンスターについて話したほうが有意義だろ？な？」

それを聞いたカールは目を閉じながら息を吐きつつ言葉を出す。

「そつだな」

レオンはその言葉に笑みを浮かべる。

その笑みを見たカールは苦笑する。

「貸しだからな」

「了解です、カール隊長！」

右手を心臓に位置するところに手を当てレオンはそう少し大きめ

に声を出す。

その声に驚いた短髪の女は、レオンをジト目に見ながらこう言った。
「隠れてんだから静かにしてなよ、レオン隊員」

手元にあったランプに火を着けながらレオンは話を切り出した。
「それでさっきのモンスターなんだが」

「俺は3年程冒険者をやっているがあんな生き物見たことがない。
いや、生き物といっていいのか？アレは」

「あたしもない、ちなみに冒険者歴、あたしは4年」

「…先輩でしたか」

「フツフツ、敬いたまへ」

その茶番を聞きながらカールはこう話した。

「私は見たことがある」

その言葉に漫才をしていた二人は同時にカールの方に向いた。
それを様子を見たカールは少し得意気にこう話す。

「…学院の古い本でだが、あのモンスターに酷似したものが」

「そつえば学院出身だったな、カールは」

「なんて本？」

短髪の女は興味を引いたのか言葉を投げかけた。

「魔と人と獣」

カールはさらに得意気に言った。

「知らねー」

「俺も分らないな」

短髪の女は興味を失ったのか、頭を掻きながら言葉を吐いた。
その様子にかールは少し不快そうな表情になった。

「あー、でさその本にどんな事が書いてあったんだい？カール」

カールはレオンを横目に見ながら声を出す。

「あのモンスターに酷似していた頁にはこう書かれていた」
杖を右手に持ち替え、話し始めようとする。

「おい、長くないように手短にねー」

と短髪の女は手をひらひらとこちらを見ずにそう言った。

「…分かった、手短に話そう」

一言だけこう前置きをしつつ話しを始める。

「アンデット、と言うものに聞き覚えはあるか？」

「あんでつと？」

短髪の女は同じ言葉を繰り返す。

「…リビングデッド、生きる屍だったか、確か」

呟くようにレオンはそう言った。

「簡単にいえば死者が不完全に蘇った結果で生まれたモンスターだ」

「蘇ったって、リーホ様でも出来ないんじゃない？」

短髪の女は少し驚いた風に話す。

「そう、出来なかった。故に生きる屍、と言うことだ」

カールはさらに話を続ける。

「過去に死者を蘇らせようとし、この世を我がものにしようと企むものがいた」

「…魔王、か」

言葉を吐くように短髪の女はそう言った。

「じゃあさっきのはあの戦争の生き残りのってことか？」

「心配するな、それはない」

不安そうに言ったレオンに、カールは腰にぶら下げた袋から水の入った皮袋を取り出しつつ、元気づけるようにこう話した。

「力ある魔王の配下は200年も昔に魔王と共に滅びた。今私が言ったのはその戦争に参加できなかった、力のない魔の物。残骸さ」

「その戦争の生き残りは確かにいたが、それも 戦争で完全に滅びた」

そう言って水飲むカールに短髪の女は問いをかけるように言った。
「力のない魔物ね、さっきの骸骨がか」

水を飲み終えたカールは肩を竦めながらこう言った。

「力がないと言っても今を生きる我々には十分驚異さ。200年前の戦争で魔王は滅ぼせたがこちらでもタダではすまなかったようだからね」

自分が抱いていた疑問をレオンは口にする。

「それにしてもここ一帯に魔物は存在しないってギルドから聞いたんだけど」

「そこはギルドにイチャモンついてガツポリと頂くチャンスだよ」
短髪の女はニンマリとした顔でそう言った。

それを聞いていたカールは空になった皮袋を元に戻しレオンらに声を掛ける。

「休憩を済んだことだし、そろそろ行くぞ」

「簡単な依頼だつて聞いていたのにねー」

周りを警戒しながら短髪の女はそう言った。

それを聞いたレオンは苦笑しながら声を掛ける。

「生きてるだけで儲けものさ」

レオン、カールという順番に通路に出る。

「まずは左だ、警戒を怠るな」

カールはそう皆に聞こえるように言った。

「了解」

とレオンは元気に返事をした。

左手にランプを持ちつつそのまま進んでいく。

「？」

足音がしない。

「どうしたんだ、早くこのダンジョンから出るんだろ？」

後ろを振り返りながら二人に言葉を投げかけた。

返答の代わりに何か大きなものが倒れる音がした。

返事をしないことに疑問を抱き、後ろの方に光を照らす。

大きな塊のようなものが床に置かれているのが見える。

手元にあったランプをその塊を近づける。

大柄な人間の形をしている。

「カール…？」

さらに奥から水が溢れるような音がする。

レオンは腰にあった剣を右手に持ち構え、ランプで前が見えるように照らしつつ歩んでいく。

水が滴る音がする。

血の臭いだ。

「そんな馬鹿な…」

小さく呟くように言った。

「…こんなことって」

さらに臭いが濃くなる。

人影が見える。

2つだ。2つの人影だ。

1つは小さく頂垂れてるかのように首を下げ、もう片方はその影の2倍近くあるように見えた。

さらに近づく。

臭いがきつくなる。レオンは震える手を抑えながら進んでいく。

その大きな人影が引き抜くような動作をする。

もう1つの人影は支えを失ったかのように音を立てて倒れ伏す。

「あ…あ…」

倒れた人影に光が当たる。

先程まで会話し、その知恵に助けられ、いつも元気づけられていた。その彼、カール。

同じく先程まで会話を交わし、悪態を付きながら、その楽観的な性格助けられていた。彼女。そして レオンの思い人でもあった。

「シェリー…！」

倒れ伏した人影 シェリー にレオンは声を上げる。

その声を聞き、大きな人影は身じろぎし、こちらを向くように見えた。

その大きな人影の顔に位置する場所には、2つの黄緑色の光が見え

る。

「っ！」

手に持ったランプをその人影に投げつけ、それと同時にその人影に向かつて走り出す。

ランプはそのまま闇へと飛んで消えていく。

が一瞬、左の暗闇の何かに光が当たる。

そこに目がけて、レオンは右足を踏み込み それと同時に剣を力強く突き刺す。

「くっ！」

手応えなし。いやわずかに引っ掛かる感覚がした。
いける、レオンはそう思いつつ周りを警戒する。

壁に背を向ける。

左側にはさきほど投げたランプの光が見える。

右側は暗闇が広がっている。あそこにはカールがいる。

そして前のは1メートル程先に壁が見える。

足元にはシェリーとその血が広がっている。

神経を尖らせ、周囲の物音一つ逃がさないようにする。

さきほど見た光を探そうと、周囲を目で探る。

仲間亡きいま、自分が頼れるモノはこの剣だけ。右手に持つ武器を握り、存在を確かめる。

鉄が落ちる音がした。左からだ。

目を向ける。ランプの近くには先程はまで無かった長い棒状のようなものが見える。

それはどこかで見覚えのある物だった。

注意深く見ると刃のような薄く尖った形をしていた。

それを見て何か感じたのか、首を下げ右手に持つ剣に視線を合わせる。

「え？」

手に持っていた剣の刃が付け根から先までなくなっている。

「」

首元で何かすり抜けるような感触がした。

体から力が抜ける。

足元から力が抜ける。

頭から地面へと向かっていく。

自らの体重に叩きつけられ、頭のどこかにヒビが入る感覚がした。

血の臭いで鼻がうまく効かない。

首元が熱い。

体が暖かくなってくる。

目の前にシエリーが倒れている。

手足に力が入らない。

声を出せない。

意識が遠のいていく。

指先の感覚もなくなっていく。

耳が遠くなっていく。

何も見えない。

そして最後に意識がなくなる直前、生きるものを挫くような声を聞いた。

「カエドキカ」

第1章第1話（後書き）

とりあえず今日はここまで、次の投稿は今日の夜か明日の零時にします。

第2話

魔物とは何か。

魔王が世界に撒き散らした過去の残骸。

人にとっての生きるためには不必要なモノ。

人が生活を豊かにするためには必要なモノ。

今を生きる人々にはそのような認識しか残っていない。

人にとっては過去は過去でしかなく、今生きるためにはその認識で良いのだ。

現代に残っているモノは力無き魔物の子孫、その殆どは現代に生きる人にとってのエサでしかないのだから。

そう殆どは

名もない小さな洞窟。この場所は賞金首や盗賊と言った、決して表には出られない日陰の者たちが住み着く場所。

このような所を人はダンジョンと呼ぶ。

その奥深く最深部に位置する場所、そこに人影が見える。

その人影は2メートル以上もあり、石で出来た椅子に座り、身じろぎ1つしない。

最初に目につくのは暗闇でも見える黄緑色の2つの光。

頭に位置する場所にそれは存在する。

全身が黒い靄のようなものがかかっていた。

下半身には布のようなもので覆われ隠れている。

左腕は肘掛けに肘を立て、手に頭を乗せている。

右手は真っ黒な槍を持ち、右の肘掛けに乗せ、じっとしていた。

「」

数刻ほど経っただろうか、身じろぎせずただ一言だけこう言った。

「
「
「
「
ヒマダナ」

その名もなき小さな洞窟、そのさらに西に位置する海沿いの街、トナミ。

トナミは元々は小さな町であり、細々と漁業で成り立っていた。

しかし50年前の戦争で、この町は王国に貢献し、王国との繋がりも得て大きく発展した。

そのため、この街は様々な種族が行き交いしている。

街の入口から真っ直ぐ行った所にある大きな建物、ここは冒険者たちが集う場所、ギルドと呼ばれている。

そのギルドの最上階にある1つの会議室、この部屋は窓がなく、光は四角いテーブルの上にある不思議な光を放つ柱のみ。

そのテーブルを囲むように座る4人の人影が見える。

「最初の1行からそろそろ1ヶ月か」

1つの影が呟くように言った。

それを聞いたその影の前に座る男がしゃがれた声で訂正するように言った。

「正確には28日だ」

「冒険者を新たに送りますか？」

眼鏡をかけた男が問いを投げる。

「適当な者を用意してくれ」

男のしゃがれた声がさらに続けるように話す。

「情報はある程度知らせてよい、内容は前と同じに生きて洞窟に関する詳しい情報持ち帰ることと冒険者の回収、名目上は冒険者の救出となるがな」

「あの」

今まで黙っていた小柄な人影が細かい声で呟いた。

「それよりも帰らない冒険者のご家族が」

それを聞いた男がうんざりとしたように言葉を吐く。

「冒険者に死は付きもんだつてのに」

「亡くなられた冒険者の保持していた財産はすべてギルドが引き受ける筈ですが？」

眼鏡をかけた男は不思議そうに話す。

「大方、仇を取るために情報が欲しいんだろう」

「今回の冒険者の中に身内はいないはずなのだが…」

「偽証ですね、たまにあります」

しゃがれと声の男に眼鏡を掛けた男はそう返した。

声のしゃがれた男は左手を出しこう言った。

「行方不明の冒険者のプロフィールを見せてくれ」

それを聞いた小柄な人影が、手のひら程の大きさの白い長方形の箱と、親指ほどの大きさの複雑な模様をしている透明な板を取り出す。

その白い箱の底に、透明な板を差し込んでから相手に差し出す。

「こ、これです、ギルド長」

受け取った男 ギルド長 は白い箱の

すると白い箱の上の部分から画像や文字が空中に浮かび上がる。

「レオンハルト・エクスナー、この人のご家族だけです」

小柄な人影はそう呟く。

ギルド長は目を細め白い箱を見る。

「この男か…」

その白い箱を見ながら、僅かに目を見開く。

その様子を前で見ていた男は問う。

「なにか不味いのか？」

ギルド長は面倒なことになったと言いたげにこう言った。

「…王族に列ねるものだ」

それを聞いた3人はピタリと動きが止まった。

ギルド長は両手を前に組み、テーブルに乗せてため息をする。

「…しかし変ですね」

いち早く冷静さを取り戻し、眼鏡をかけた男は呟く。

「例え偽名でも王族ならば誰が見てもひと目でわかるはずなのですが…、まさか」

「そのまさかだ」

ため息と共にとしやがれた声で返す。

「問題はこの冒険者のことで異論を仰っている御仁の方だ」

「ご存知なのですか？」

「……………ユリアーネ王女だろう」

吐き出すようにギルド長はそう言った。

「おいおいおいおいおい！」

男は焦ったように声を荒らげ喋る。

「不味いなんてものじゃないだろう！」

「あ、うえ、と、ど、どうでしょう…」

「どうしたもクソもあるか！何で王女がこの街に来てるんだよ！」

男と小柄な人影は慌てふためく。

「リン」

しやがれた男は声をかけた。

「は、はい！」

小柄な人影 リンは背筋を伸ばし声を上げた。

ギルド長は話を始める。

「先ほど帰らない冒険者のご家族が、と言ったな？」

「え？あ、はい、そうですか…」

リンは不安げな表情をしている。

「咎めているのではない、ただ確認だ」

安心させるようにしゃがれた声でギルド長は優しく話した。

「はい…そう仰っております…」

「結構」

問題は解決したという風に一言そう言いながら、白い箱を操作し浮かび上がっていた冒険者の情報を消した。

「へ？」

リンはそう言う、訳が分からないといった風に面食らう。

眼鏡の男は納得がいったという風な顔をする。

「つまりどういう事なんだよ」

「我々は何も知らなかったと言うことですよ」

何でもないようにそう声に出した。

ここで2人は合点がいったという顔をする。

「長も人が悪いな」

男は顔を歪ませて笑い、ギルド長を見ている。

ギルド長は静かにこう話した。

「王女としてではなく、家族として来ている。ならばそういう対応をしているだけだ」

「あとは王女様を何とか説得出来れば問題は解決と言うことですね
安心したように眼鏡を掛けた男はそう言った。

「説得できずとも王女がこの街にいるという噂を流せば、自ずと諦めて城にお戻りになるだろう」

「さらに時間が経てば王国からお触れが出る。その時に王女を王国に引き渡せばよいのだ」

眼鏡を掛けた男の話し続けるようにギルド長は話をした。

「くれぐれも王女様御一行から目を離すことのないように」

皆の目を見ながら確認するように言った。

「話しは戻るが」

ギルド長は静かに話しを始める。

「あの洞窟で何があったのか分かるものはいるか？」

ギルド長は3人を見渡すように問いかけた。

「前の会議で知つての通り最初の1行はCランク、つまりその辺のモンスターでは相手にならない、と言うことを念頭に置いてください」

そう言つて眼鏡の男は黙つた。

「んー」

軽く唸りを上げて男は考え込んでいる。

リンは確認するようにこつ言つた。

「魔物の可能性はありませんか？」

「聖域を抜けてわざわざあの洞窟に待ち構える意味が分からないな」
その問いに男は返す。

「現代に聖域を抜けられる魔物がいるのでしょうか」

肩をすくめつつ眼鏡の男は話した。

ギルド長は結論を出し、話を続ける。

「一先ずは保留だな」

「他に何かないか？」

「……………」

その問いかけに誰も答えることのできるものはいなかった。

「今は情報が欲しい。予測でもなんでもよい、妄想と捕らわれる発言でも結構、好きに述べよ」

その言葉に効果があったのか、リンを初めに話し出した。

「地盤沈下で」

「只の事故死はどうでしょう」

「もしかすると魔人だったりしてな」

「報告を怠っただけだったとか」

「いや、案外……」

3人は考えられる限りの可能性を上げていく。

その様子を見て、ギルド長　50年掛けてこの街、トナミをここま
で発展をさせた男　は仕方ないとも言わんばかりに顔を俯けてた
め息をついた。

（　　しかし）

目を閉じてギルド長は思索する。

（最初のCランクが、次にC+のランクの全滅、そして最後に送っ
たBランク相当のパーティも既に全滅していると思ってもいいだろ
う）

（可能性があるとしても魔物はない　　と言いたいが）

僅かに目を開け、今だに3人が話している様子を見、さらに思索す
る。

（予感がする。50年前にも感じた、あの予感が）

（最低でも聖女の聖域を越えることの可能な魔物　　今の時代に
倒せるものがあるのか？）

第2話（後書き）

次の投稿は明日の夜8時～10時の間に行います。

第3話

魔王。それは200前に突如として世界に現れ、この世界に絶望を撒き散らしてた。

その時に魔王がその存在を世に送り出したモノ、魔物。

それは魔王のために生まれ、魔王のために殺し、魔王のために世界と生きる者を破壊し、魔王のために蹂躪し尽くすためのだけの存在。

現代では過去の文献はほとんど残っておらず、そういった驚異もすでに過去へと流され人々の記憶から消えていった。

それ故に魔物に対抗出来る術はなくなり、現代に存在する力無き魔物にさえ手を焼かされている。

悪いことばかりではない。魔物に対する恐怖も消え、今を生きる者たちはたくましく生き、明日へと希望を持てるのだ。

そう、過去の魔物のような存在が現れない限りは。

暗闇の中から足音が聞こえる。

その足音の主は2メートル程の大きな人影。

光が当たる場所に出て、その容姿が見える。

右手には真っ黒な槍を持ち、下半身は布で覆われている。

全身からは靄のようなものが湧き出し、その全貌はつかめない。

僅かに顔の輪郭が見えた。それは肉のついてない骨格のみ、つまり髑髏であった。

その目に位置する場所には黄緑色の光が、2つ、はめ込むように存

在した。

その死神のような風貌をしているモノは、立ち止まり、動きを止める。

今まで動いていたことが幻であつたかのように。いや、動いてない方が生き物として正しいのだ。

そのまま動きひとつ見せずただじっとしている。

「

どれ程たつたのだろうか、呟くような声がした。

「

「

「

「マヨッタ」

ジャオー王国。このクツビ大陸の中央に位置する場所にある。

その国は金には困らず、資源が潤い、力もある。

皆がこの国の王を讃え、詩人は歌にし、子供たちはその歌を聴き、王に仕える騎士として夢を見て育っていく。

そんな国の主であり、この大陸の覇者でもある王。その王が顔を険しくし、小さく唸っていた。

ここは王の仕事部屋、机にはもちろん王が座り、目を鋭くし、前を見ていた。その王の視線の先には2人の男が膝を付きこちらに頭を下げて黙っている。

「それで」

王は顔をそのままに声を相手に投げかける。

「お前たちはここで何をやっているのだ？」

そう話すと王は黙った。

「恐れながら」

膝を付け、頭を下げている短髪の男は一言そう言い、話を続けた。

「我々に王女をお迎えに上がる命令をお与えください」

「娘を見す見すと見過ごす者に行けと命令をしろと？」

その言葉に王は被せるようは言った。

短髪の男は力強く話す。

「我々では不足と仰るのなら、他のものに命令を与え、我々も同行をさせてください」

その言葉に王は片方の眉を上げる。

「娘の責任についてはどうするつもりなのだ？」

そう聞くと短髪の男はさらに力強く返事をした。

「はっ、そのご命令を完遂した後に、騎士としての任を解く所存であります」

「」

ここで初めて王の顔つきが大きく変化した。

「…なるほど、それほどまでの覚悟ならば命令をしないわけにはいかないな」

王はため息と共にそう呟いた。

2人は膝を付き頭を下げ動かない。

そんな2人を見ながらこう言った。

「ユリアーネ王女を無傷で連れて帰り見事任務を完遂させるのだ」

「「御意」」

その言葉を聞き、膝を付き頭を下げたまま返事をした。

「行け」

もう一言だけ王はそう言って言葉を出した。

「「はっ！」」

2人は立ち上がり、後ろの扉に行き、頭を下げ、出ていった。

それを見送った王は一言だけ言葉を吐くようにいった。

「…手を煩わせ寄って、面倒な娘だ」

城下町の一角にある酒場。酒と煙が漂い、喧騒が絶えない、賑やかな場所。

その中の1つのテーブルに短髪の男と顔が傷だらけの男が酒を飲み、話しを交わしている。

傷だらけの男は酒を手に取り、こう言った。

「お前のせいで俺まで任を解くことになっちまったじゃねーか」

酒を呷りながら短髪の男を睨みつける。

それを見た短髪の男は軽く笑い、こう言った。

「すまない」

「お前、これポツチも罪悪感ねえだろ！」

酒の底をテーブルに叩きつけ、左手の人差し指と親指で小さな隙間を作る。

「一応謝る気はあるさ、形だけだがね」

傷だらけの男が持つ酒を指差し、こう続けた。

「酒、今日は私の奢りだからな」

「毎日俺が奢っている、俺の立場は！？」

傷だらけの男は両腕を左右に広げ、叫んだ。

それを聞いた短髪の男はそのままの表情でこう言った。

「あれはフランツが賭けに負けているせいだろう」

それを聞き、傷だらけの男 フランツ は両手を下ろし、目をそらしてこう言った。

「あれはためーの運がおかしいだけだったの」

フランツはブツブツとつぶやき続ける。

「第1なんだよ、20連続ロイヤルストレートフラッシュなんて、訳わかんねーぞ……」

「運も実力、内だよ」

「お前の運は狂ってる」

短髪の男の言葉に続けるよう、フランツはそう言葉を吐いた。

大きくため息を吐くと、フランツはこう話を切り出した。

「で、こんなところで悠長に酒飲んでてもいいのか？騎士団長殿」

「今の私は王から命令を受けた一介の騎士さ」

手元にあつた酒を手に取り、短髪の男はそう話を続けた。

「それもこの任が終わればそれもなくなくなる、後ろたては何もない只の一般人になる」

そう言つて酒を口に付ける。

「王がお前を手放すとは思えんがな」

近くを通つた店員に注文をし、フランツはそう話した。

「王がなんと言おうとも責任は取らねばならん」

はつきりとした口調で短髪の男はそう言った。

「相変わらずだな、アレクさん」

と隣のテーブルでパイプを吸っていた男がそう声をかけた。

フランツは不審そうにその男を見ながら言った。

「アレク、知り合いか」

短髪の男 アレク は小さく頷いてその男に声をかける。

「久しぶりだな、トニー」

人差し指を軽く振りながらこう言った。

「今の名前はヤンだ」

にやりとヤンは顔を歪めながら話を続ける。

「姫様の情報欲しくはないかい？」

それを聞いたアレクは表情を変えずにこう聞き返した。

「いくらだ」

「……………」

フランツはいつでも動けるように僅かに腰を上げて黙っている。

そのアレクの返事を聞いて、顔をさらに歪ませて、話を続ける。

「さっすがアレクさんだ、話が早い」

ヤンは右手を広げ、こう言った。

「金貨5枚」

その言葉にフランツは僅かに動いたが、それに動じないアレクを

横目に見て動きを止めた。

アレクは無言で懷に手を入れて、それをヤンに投げやった。
ヤンは慌てて投げられた金貨を取りる。

「イヒヒヒヒ、毎度あり」

と顔を歪ませたまま笑い、懷に大事そうに直した。

「それで？」

テーブルに肘を付きながらアレクは聞いた。

「へい、西のトナミつてこのギルドで、その姫様に似たお方とその付き人らしい者を見たらしいぜ」

「聖女の聖域か」

それ聞き、アレクは手に顎をやり、呟いた。

「それともう一つ」

ヤンは人差し指を立ててこう続けた

「最近、あの街は何かきな臭い、注意して姫様の情報を探りな」
「きな臭い？」

アレクは眉を顰めて聞いた。

「冒険者が次々に死んでいつている」

声を潜め、ヤンはそう話を続ける。

「どうもギルドの連中が噛んでいるって話した」

さらに声を落とし、こう言う。

「噂じゃ、街の近くに厄介なモンスターが出たんだと」

「……………」

フランツはじつと話を聞き、黙り続けている。

懷からもう一枚金貨を出してながら

「助かった、また何か情報が入ったら頼むよ」

そう言い、アレクはコインを指で弾き、ヤンのいる方向に飛ばした。

「イヒヒ、ではまた御贔屓を」

それを受け取りながら立ち上がり、そう言って立ち去った。

「それでさっきの情報は正しいのか？」

フ란ツは酒場の入口を横目に見つつ、そうアレクに問うた。

「トニーの　　いや、ヤンの情報は正確さがウリだよ、少し値が張るがね」

フ란ツの問いに軽く笑いながら、そう返答をした。

「……………少しってお前なあ」

アレクを指差しながらフ란ツは力が抜けた風にこう続けた。

「金貨1枚で家が建つんだぞ」

「王女様の情報が手に入ったんだ、安いものだ」

軽く目を閉じ、アレクはそう答えた。

「冒険者が死んでるってのは不安だが、場所は分かったんだ。急いで行けば、間に合うな」

肘を付き顎を手に乗せてフ란ツはそう結論を出した。

「しかし付き人ってのは、姫様の護衛だろ？なんて言ってたっけ……………」

「プリンセスガード」

呟くようにアレクは言った。

「そうそれ、女だけで構成されている部隊。王が姫様のご機嫌取りのために作ったとか何とか」

フ란ツは目を上に向けて話しを続ける。

「確か全員美少女だって話しだしな。こりやお近づきになっておいしい思い出来るかもな！」

腕をグツと前に出し、満面の笑みを浮かべている。

「戦力になるのか？」

アレクは目を開き、フ란ツに問うた。

それを聞いて頭を掻きながら答える。

「あー、護身程度にっつてのは聞いたな」

「元々護衛役じゃなくて、姫様の遊び相手だからな。期待はしない

「ほうがいい」

両腕を左右に広げ、そう返した。

「肉壁ぐらいになればいいが…」

顎に指を置き、そう呟いた。

「そんな物騒なこと言ってんじゃねえよ、タコ」

「元々はどうあれ、主に剣を捧げているのだ。そのくらいは当然だろっ」

それを聞いたフ란ツは頭を掻きながら話す。

「そういう奴だったな、お前は」

「騎士として当然のことをしているまでだ」

アレクは厳然としてはつきりとそう言った。

フ란ツは肩をすくめ、酒を手にとった。

「見解の違いつてやつだな。そろそろお開きにしようぜ」

そう言ったフ란ツの姿に、アレクは力が抜けたのか緩い笑顔を
見せながら酒を持ち、返事をする。

「そうだな」

その言葉と同時に2人は酒を呷った。

第3話（後書き）

次の投稿は、今日同じく、明日の夜8時～10時に行います。

第4話

この世で初めに生まれた人。それは文字通り、この世界で最初に生まれた者、その子孫。世界で最も多く存在していた。

この生き物はこの世界を統治し、すべての生き物の頂点に君臨したと言われている。

他の生物は、この者の力に憧れ、この者の姿を真似、生きる術を模範し、手本として現代に繋がってる。

耳が長かったり、体が小さい、または大きいといった人種に違いがあるのは、自分の姿に誇りを持っていた現れであると言われている。そのせいか、その身体的特徴を大事にし、貶されれば、怒り、悲しむ。

この世界は様々な人種性別が存在し、現代を生きている。いつまでも続く明日を信じ、今を生きて、希望をもって生きているのだ。

希望が絶望に変わるその瞬間まで。

天井からランプが垂れ下がっている。

その光でぼんやりとだけ大きな人影が見える。

それは全身に靄が湧きだし、静かに動きを止めていた。

右手には真つ黒な槍を持ち、下半身は布で覆われて、中を伺うことができない。

只、目と言える場所からは、うつすらと黄緑色の光が2つ、浮き出

て、自らの足元を見てた。

足元には3つの塊が光に照らされて見ることができた。その塊らには黒い靄が立ち、全体を覆って、それが何なのか知ることとはできなかった。

「
」

大きな影はその3つの塊を見ながら、こう呟いた。

「
コレニスルカ」

すると大きな人影の全身を覆っていた黒い靄が揺らめく。

少しずつその大きな人影に覆われていた全貌が見え始めた。

黒い靄が足の指先から太もも、胴体、首、そして頭を通り、頭上に集まり出した。

まず足。それは僅かに黒ずんだ白い骨が見えた。

腕にかかった靄も蠢きだし、持っていた槍も、音を立て床に落ちる。太もも、胴体、両腕と見え始めたが、すべて肉の付いてない体、つまりは白骨の肢体であった。

そして残す最後の頭の靄も、頭上に集まり終わった。

集まったと同時に黒ずんだ骨の体は崩れ落ちた。

そしてその黒い靄は、足元にあった1つの塊に向かってその塊を覆っていた靄と一体化し、蠢き出した。

数刻ほどたっただろうか、その靄は完全に塊の中に沈んで、覆われていた塊は姿を見せた。

ランプの光に照らされたそれは人の形をし、体の装備を見ると、冒険者のように思えた。

その者は体を起こし、右手を顔に置いた。

ゆっくりと目を開けた。その目には黄緑色の光がうつすらと見える。そして呟いた。

「
上手くいった」

男は立ち上がり、右手は首元に置き、首を回す。。

ふと首に違和感を感じた。

後ろの首元に触れてみると、切れ目のようなものができているのが

分かった。

手を前に戻すと、黒ずんだ血が付いていた。

「忘れていたな」

足元にあった2つの塊を見ながら、しゃべり続ける。

「これも取り込んでおくか」

そういつてその塊に近づいて、傍らに座り、手を触れる。

すると黒い靄が晴れ、ここで初めてその容貌が見えた。

塊は、同じく人の形をし、お腹に大きな風穴ができている人間の死体であった。

男は腰にある剣を抜いた。

「……………刃がない」

そう言つて、男は手に持った刃のついてない剣を後ろに捨て、死体が装備しているナイフを抜いた。

死体の前腕を持ち、上腕と前腕の境目にナイフを　突き刺す。

血が顔にかかり拭いてもせずに、ゆっくりとナイフを膝の内側から外をなぞるようにくりりと回し、切り込みを入れる。

血まみれになったナイフを床に置き、右手は上腕を抑えて左手で前腕を拗じるように引っ張る。

木の枝が折れた音がした。取った前腕を見る。血の臭いと僅かな死臭がするそれに顔を近づけ　噛み付く。

口元が血で真っ赤に染まり、血の臭いが濃くなった。

前腕の肉を喰らつて、次は骨を噛み砕く。

邪魔な装備をどけながら、血まみれのナイフを持ってその死体の肩に突き刺す。

その調子で、死体すべての肉と骨と喰らつて血を飲み切ると、もう片方の黒い塊にも手をつけ、喰らう。

さらに半刻が立ち、ここで手を止める。

床には血がこべりつき、むっとする血の臭いが周囲に立ち込めていた。

男は立ち上がり、近くに落ちていた槍を手取る。

「奥にまだあったな」

そう呟き、暗闇に消えていった。

トナミーの高級宿、カータ。その最上階は1部屋しかない。

しかし、そのフロア丸々と使い、中は様々なワインや食事を味わうことができ、プールに温泉にカジノといった娯楽も楽しめる。

そんな贅沢な空間に2人の男女が窓から見える夕暮れの太陽に照らされて見えた。

2人の男女が声を荒らげ、言い争っている。

いや、言い争っているというにはあまりにも一方的だ。

赤い短髪の髪が目立つ男は、相手に両膝を床につけ、頭を下げ、土下座に近い格好で相手に許しを乞うている。

その男の頭に足を置きながら、がなっている女は、腰に下げていた全長80センチほどの細い剣を抜き、男の首に刃の部分を翳す。

「ひっ」

男は小さくうめき声を上げて、声を掠れさせながらさらに許しを求め、声を大きくした。

男の頭に足を置いている女は男に聞こえるように舌打ちをする。

それが聞こえたのか男は1度だけ体を揺らし、許しを求める。

その小柄の体のどこにそんな力があつたのか、男の頭に置いていた足に力を込め、蹴り飛ばす。

近くにあった椅子を巻き込みながら、男は壁にぶつかってようやく止まった。

もう女の視界には男は写っていない。もう一度舌打ちをして、その手に持つ剣を腰に収め、頭の後ろで軽く括った短い髪を翻し、自身の後ろにあった扉に向かって開けた。

そこには通路が広がり、3つ先の扉を、軽く2度叩いてこう言った。

「失礼します」

そう一言だけ言って、中に入る。

その部屋の中には、金色の長い髪を後ろに流した女性 というには幼すぎた1人の女の子 は両手を太ももの上で組み、椅子に腰をかけてぼうつと窓の外に顔を向けていた。

その小さな女の子の下に行き、片膝を付いて頭を垂れる。

「姫」

そう一言置き、話を続ける。

「この街の情報を調べてみましたが、今だレオン様の行方は掴めておりません」

外を眺めていた女の子はその声に反応を示さずに只、窓から見える雲を目で追いかけている。

夕焼けに染まった姫の何も言わない様子に、焦ったふうに話を続ける。

「それと妙な噂を耳にしました」

「この辺りで力の強いモンスターが出た、と」

姫は暮れる夕日に視線を移し、静かに呼吸をしている。

「それと言にくいのですが」

と一言置き、話をする。

「どうも我々がこの街にいるという噂が…」

「王国からのお迎えが来るのもそう遅くはありません」

「このままでは姫までがこの責任を取らされ、当分城から、出ることも叶わなくなります」

頭を垂れていた女は、その青みがかった黒い髪を上げ、姫の耳に触らない程度で声を上げ、はっきりとこう進言をした。

「王国に帰りましょう。今、お帰りになれば私が責任を取るだけで収まります。また頃合を見てからレオン様を探しましょう」

そのままの体勢で女は続ける。

「この街に来てもう3日目になります」

「それに城の方にもレオン様からのお手紙が届いているかもしれま

せん。果報は寝て待てとも言います、焦らずにゆつくりと探しましょう」

夕焼けを見ていた姫 ユリアーネ姫。ジャオー王国の第3王女はその金色の瞳を静かに閉じた。

そしてゆつくりと口を開いて それと同時に扉を開ける音が壁の向こうから大きく聞こえた。

「し、失礼します！…あれ、おかしいな、もう1つ隣かな」

声と共に音を立てて扉を閉めて頭を抱えるような男の気配がする。ユリアーネは開いていた口を閉じ、目を窓の外に向けた。

女はため息をつき、ユリアーネに進言をする。

「…失礼、少々お待ちを」

そう言って立ち上がり、静かに扉を開き、そして閉めた。

「あつ、オイフェさん！姫にお話したいこと…がつ！」

男の嬉しそうな声と共に鈍い音が周囲に鳴り響いた。

「これでうまくいくといいのですが…」

手に持った眼鏡のレンズについた誇りを拭き取りながら男は呟いた。

その男は椅子に座り、部屋の明かりに照らされている。

ここはカータの上から三番目に位置する部屋、そこで男は眼鏡に息をかけてさらに磨く。

満足したのか、磨くのをやめて眼鏡をかけた。

小さくため息を吐くと机の上にあった、白い箱を手にとって操作しながら男は思考する。

（とりあえずはこの街に王女がいるという情報を王女側に流せたはずです。これに焦って場所を変えるか、城に帰るはず）

その箱の上に姫とその護衛らしき者の画像が表示された。

男が操作すると。すると画像は文字に変わり、別の情報が表示された。

（これを知れば王女を守るためにもしかすると、ギルドに保護をもとめてくるかもしれません。この街にも王を良く思っていない人も多く存在するはず）

（リンがうまく説得できていればこんな苦労もせずにすんだのですが）

男は扉の前に直立姿勢で待機している、緑がかった髪をした耳の長い男に目を向ける。

「タロ、王女の周辺に不審な人間はいませんでしたか」

眼鏡越しに男は相手の目を見てそう聞いた。

「はい」

耳の長い男 タロ はそう一言だけ言って黙ってしまった。

その様子を見ていた男はため息をつく。

（この男、優秀ではあるのだが無口すぎる）

再び、机にある文字の浮かび上がった白い箱に目を向け、情報を確認する。

（何事もなければよいのですが……）

第4話（後書き）

今回はいつもより早く投稿しました。

次の投稿は月曜の夜の8時〜10時に行います。

第5話

ダンジョン。

そこは決して表には出られない人間や家畜が野生化、凶暴化したものの住処でもある。そのためか見つからないように盗賊や賞金首自身のお宝を隠されている場所。

それを目当てに冒険者はダンジョンに潜るのだ。お宝を奪われないようにする罫はもちろん、逆に冒険者の装備を狙う者もいる。

ダンジョンは洞窟だったり昔の王族や貴族が住んでいた廃城、はたまたは空に浮かぶ大きな塔というのまである。

一口にダンジョンと言ってもいろいろある。古に滅びた国のお宝が眠っていたり、過去に生きた魔法使いの資産が残っていることもあり、見つけたものは財宝だけではなく、名誉を手にもすることもできる。

それ故に人は魅了され、金銀財宝に囲まれた自分や自身の英雄となった姿を夢見て、ダンジョンに潜り冒険者たちは命を賭けるのだ。

「ここがその洞窟」

日も暮れ、暗い森の中に囲まれた小さな祠、そのすぐ横に地下へと続く長い階段がうつすらと見える。

その小さな祠の上にランプを置きその光に照らされている3人の人影が映る。

ランプに照らされ、僅かに見える階段を見下ろす形で3人の男女はいた。

「姫」

細長い剣を腰に下げた女性は一言、傍らにいた暗闇でもわかる金色の長い髪をした女性にそう言って話しを続ける。

「本当に一緒に行かれるのですか？」

眉を顰めて、ランプに照らされわずかに見えた青みがかった髪の女性 オイフェ は心底心配そうな表情を見せた。

階段の奥の暗闇を目を向けたまま、その言葉に姫は小さく頷く。

「我々では姫を守りきる自信がありません。あまりにも危険すぎます」

オイフェは胸に手を置き、必死に姫を説得しようとする。

「一度街に帰りましょう。せめて明日まで明るくなるのを待ち、冒険者を雇いましょう。今行くよりも安全なはずですよ」

オイフェが懇請している相手 ユリアーネ は視線の先にある階段を見て静かに沈黙している。

「オイフェさん、そろそろ決めないとモンスターが寄って来ちゃいますよー」

ランプの光がその赤い頭を照らし、周囲を伺いながら力の抜けるような声で男は言った。

その言葉にオイフェはその男を一度横目に見て、ユリアーネの様子をもう一度見て、静かにこう言った。

「…我々の近くを必ず離れないようにお願いします」

オイフェは皮で出来た黒い手袋で包んだ手で祠の上に置いてあったランプを取り、階段を照らす。

「ゲル、お前は姫の後ろを守れ」

鋭く言葉を出し、オイフェは周囲を見回していた男 ゲル の方を向いた。

「了解であります！」

右手を胸の前に置き、ゲルは元気に返事をした。

そんなゲルの様子にオイフェは軽く目を瞑りため息をついて、何故このような事になったのか、先刻前までにあった出来事を振り返っ

た。

「その話しは本当か？」

ここはカータの最上階。その扉の前にオイフェは、その赤い短髪の頭を抑えているゲルに、もう1度声を潜めて聞き直した。ゲルは先ほどオイフェに殴られた箇所をさすりながら話す。

「は、はい、確かです。レオン様はこの街の東にある洞窟でその行方を絶ったと」

今だ頭をさすっているゲルを尻目に、オイフェはどうしたものかと思案する。

（この話しを姫に話せばその情報を元に洞窟に行かれるのは手に取るように分かる。それも今すぐに）

（今、この情報を姫にお知らせするのはマズイ、もう日は暮れ、夜に差し掛かっている）

通路の先にある窓に視線を向ける。そして軽く目を瞑り考えを模索する。

（この時間に洞窟、いやダンジョンに入るのは危険すぎる。仮に行くとしても人手が足りない）

（…明日。この情報を明日、姫にお知らせしよう）

目を開き、姫のいる部屋の扉に視線をやる。

（レオン様からのお手紙が姫に送られなくなったのはもう1ヶ月になる。分かってはいたが、ダンジョンで行方が消えたとなれば、もう……）

視線を下げ、オイフェは顔を曇らせていた。

そんなオイフェの耳に何か軋むような音が入ってくる。

ふと視線を上げるとゆっくりと扉が開いていた。その先には金色の髪と金色の瞳、それと先程まで着ていた白い部屋着ではなく、周

りに溶け込むようにと、購入した外出用の丈夫な革製の服に、その上には火に強い魔法のかかったクローク 少々値は張ったが に着替えたユリアーネが立っていた。

「ひ、姫……」

オイフェは裏返しそうな声を喘ぐように出し、ユリアーネに視線を向けた。

そんな様子を知ってか知らずかゲルが嬉しそうにこう話した。

「姫！この街の西にある洞窟にレオン様がいるとの情報を耳にしました、確かな情報です！」

「ゲルっ……」

オイフェのがなりと共に一際大きな鈍い音を立て、ゲルの悲痛な叫び声とその宿中に鳴り響いた。

そして今に至る。

（その後、なんとか説得しようとはしましたが、レオン様のこととなると姫は一步も譲りませんから……）

後ろにいるユリアーネの気配を感じながら、ため息を吐き、口を開いた。

「姫」

オイフェは後ろを振り返りながら、右脇にある全長50センチ程の短剣を、鞘ごとユリアーネに渡しながら話を続ける。

「護身用です。念の為にこの短剣をお持ちください」

「足元にはガレキや錆びた鉄の破片などが散らばっております、お気を付けくださいますように」

ユリアーネの目を見ながら、はっきりとした口調で話す。

「この先は大変危険です、ここからは私の指示に従い、行動してください」

頷くユリアーネを確認した、オイフェは再び前を向き、真っ直ぐ

と暗闇に続く階段の先を見る。

目を閉じてゆつくりと息を吐く。

（この先には痴れ者やモンスターといった危険な存在が多く潜むダンジョン…）

ゆつくりと開くその瞳には、強い光が宿っていた。

（例えこの身が朽ち果てようと、姫だけはお守りしなくては）

前に広がる暗闇を、左手に持つランプの光でかき分けながら進んでいく。右手を腰にある細い剣の柄を握り締め、周囲を警戒して階段を降りていった。

暗闇に2つの光が見える。

微かに漂う血の臭い、それと遠くでネズミの鳴く声がする。

そして3つの足音。ランプの取っ手が軋む音を立てながら、その一行は進んでいく。

「あつついな……」

後ろをついてくる男が気怠げ声を漏らす。

男は手に持ったランプを周囲の闇に当てながら話を続ける。

「しかし静かッスねー。本当にこんな所で見つかるんスカねー」

ゲルは左腕につけている弓のようなものを手で確認しながら誰に話すでもなくただ声を出し続けた。

「まあ、情報だところであってるんスけどねー。いるといいですねー、レオン様」

一番前を歩くオイフェは何も言わずに警戒しながら進んでいく。

「それに見つかったとしても、帰るときに食料持ちますかねー」

オイフェはゆつくりと歩みを止めた。それにつられて後ろを歩いていた2人も足を止める。

当然足音も止まり、ダンジョンには遠くから聞こえるネズミが這う

音しか聞こえなくなった。

「オ、オイフェさん？」

歩みを止めたオイフェにゲルは怯えたように声を掛ける。

「」

「い、いやなんというか、その」

ゲルは慌てるように声を出し話を続ける。

「ひ、姫が退屈しないようにと」

「ゲル」

そんなゲルに一言だけ声をかけた。

「何か変じゃないか？」

オイフェの言葉に虚を突かれたのか、目を点にして言葉を返す。

「変？」

「ああ、確かに静かすぎる」

ランプの光で周囲を照らしながらそう言った。

「かなり奥まで潜ったが、モンスターどころか罠の1つもない」

「これではダンジョンではなく、ただの洞窟だ」

オイフェは目の所まで上げていたランプをゆっくりと下ろす。

「ガセでも掴まされたか、あるいは」

警戒は解かずにゲルに視線を送り、口を開く。

「あるいは？ なんだいお嬢ちゃん」

オイフェは視線を戻し、前に広がる闇に目を凝らす。

その暗闇から2人の男が姿を現した。

1人は体は小さいが、暗闇からも確認できる程にその両腕が不自然なほどまでに盛り上がっている。

もう片方の男は背の高さこそ普通だが、体が枝のように細く両腕は地面につくほど長い。

「こんな危ない所でお嬢ちゃん達は何をやっているのかな？」

筋肉質の男がゆっくりと歩きながら話をかけた。

「…この先に用があるんだ、退いてくれないだろうか」

6メートル。視線を近づいてくる2人の男に向けながら、オイフ

エは静かに提案をした。

「だからこの先は危ないって、お嬢ちゃん達が心配で言っているんだよ？」

男は歩みを止めず、その盛り上がった両腕を軽く広げながらさらに話す。

「行くにしても帰るにしても、おじさん達心配で心配で。そうだ、俺らも一緒に行こう。これなら安全だ」

オイフェ達に向かってくる筋肉質の男は、名案だと言いたげに微笑みを浮かべている。

5メートル。そんな2人の男から視線をそらさずに、オイフェはランプを離し、地面に落とす。

そして腰の剣を右手で静かに抜き、剣先を地面に付ける。目を鋭くし、ゆっくりと腰を落とす。

ランプの火がオイフェの体を照らし出している。

筋肉質の男は困った顔をしてこう話した。
「お嬢ちゃん達のために言っているんだぜ？命までは取りはしないよ」

4メートル。その問いにオイフェは何も答えず、2人の男の武器を目で確認する。

筋肉質の男の両手の甲には鉄製の装備がされている。そして、もう一人の男、その腰には60センチ程の大きさの短剣が2つかかっていた。

何も言わないオイフェに男は首を振りながら言葉を吐いて止まる。
「やれやれ」

オイフェの体が僅かに揺れ、痛みが走る。

痛みの走った場所は右肩の関節部、それも後ろからの衝撃。

右手に力が入らず、剣を落としてしまう。

オイフェは視線を後ろに送る。

2メートル先にオイフェがユリアーネに持たせていた短剣を、ユリアーネの首筋に刃を向けているゲルが見えた。

「動くなよ？オイフェさん」

顔を歪ませてユリアーネの体をランプを持った左腕で首を絞めながらそう言った。

さらに腕につけていた弓らしきもの　ボウガン　に矢を装填し、オイフェの右の太ももを打ち抜いた。
「ぐっ」

その痛みで小さく呻き声を上げ、オイフェは地面に左膝を付けてしまう。

「だから言ったのに」

筋肉質の男は顔をニヤつかせながら首を振る。

体を動かそうとオイフェは右足に力を入れるが、上手いかわないのか体がよろめき、左手を地面につけてしまう。

「そっちのお嬢ちゃんが俺らが貰うんだよな」

筋肉質の男は、ゲルが人質に持っているユリアーネを指差しそう言った。

「そうそう。で、そっちにいるオイフェさんは俺」

短剣をオイフェに向けながらゲルはそう言った。

男たちの話しが耳に入ってくる。肩から血が流れ、腕を伝い、右手から地面に落ちる。

再び、歩いてきた2人に視線を送り、頭を下げる。

2メートル。右肩が熱い、腕はともかく、右手には力が入らない。太ももも痛むが、足には力が入りそうだ。

前には2人の敵、実力は未知数。今の状態で手を出すのはマズイ。ならば　。

「こっちの嬢ちゃんも俺たちにも楽しませてくれよ」

筋肉質の男は、オイフェを指差しながら、ゲルに話す。

それを聞いたゲルは眉を顰めながら、嫌そうに言葉を返す。

「だめだよ、そういう約束はしてないだろ」

「今決めたんだ、いいだろ？」

ゲルと筋肉質の男は話を続ける。

「約束は約束だ、いい加減にしろ」

「おいおい、今の状況を見てどっちが不利か分かんねえのか？」

筋肉質の男は隣にいる細身の体をしている男を見てそう答えた。腰に垂れ下がっていた短剣を手に取り体の細い男は、目をギョロつかせながらゲルを見た。

（　　ここだ　　）

オイフェは左足でランプの火を消し、左手で落とした剣を手に取り取る。

「なに？」

2人の内どちらかの男が声を上げる。

痛む右足に力を入れて、後ろに飛ぶ構えをした。　　それと同じ

時に風を切る音が前から聞こえる。

（ふっ！）

左の剣を振り上げ、飛んできた何かを弾いた。

その音に反応したのか、再び、さっきと同じ風切る音が聞こえ、こちらに向かってくるのが分かった。

オイフェは後ろに跳び、回避。先程までいた場所に何かが刺さる音がした。さらにゲルが持っているランプの手前で止まる。

ゲルの目には、鋭い目をしたオイフェがそのランプに照らされこちらに跳ね上がり、振りかぶる姿が映る。それを見て焦ったゲルはユリアーネを盾にする。　　その直前に一瞬、光がゲルの視界に走る。

ランプが落ち、足元が照らされる。

「え？」

ゲルは小さくそう呟き、動きを止めた。オイフェはそんなゲルに構わずに蹴り飛ばし、ユリアーネを取り返した。

後ろから2つの走ってくる足音が聞こえる。オイフェはユリアーネを血塗れの右腕で抱え、右に続く暗闇に音を立てずに走り出す。後方からはゲルの悲鳴が遅れて聞こえてくる。

「お、俺の俺のう、うでがぁ！」

暗闇の中で荒い息遣いが聞こえる。

体のほとんどが血塗れの女は、腰にある袋から包帯を取り出し、自身の怪我の治療をしながら小さく喘ぐようなうめき声を上げている。その傍らで暗闇をぼんやりと見つめている、もう一人の女性は、服は血で塗れているが怪我はない。

「姫」

治療をしながらその女性 ユリアーネ に話を掛ける。

「このような格好で姫と会話をするをお許してください」

今しがた走ってきた暗闇を横目に見つつ、急いで話を続ける。

「私の部下が大変失礼をしました」

オイフェはその体勢で頭を下げる。

「お怒りは重々承知ですが、今しばらくはそのお怒りをお静めください」

何も言わないユリアーネにオイフェは頭を下げたまま、さらに話を続ける。

「私はこの通り、姫を満足に守れることができない状態です」

「今は目の前の脅威を取り除くことで精一杯です」

「申し訳ございませんが、今日はレオン様の探索は不可能でございます」

頭をさらに深く下げて、オイフェはユリアーネに進言した。

「この場所を抜け出し、今回の所はお城に帰還しましょう」

そしてゆっくりと時間だけが過ぎていく。ユリアーネは何も言わない。

応急処置が終わり、腰の袋に治療道具を直しながらこう思う。

（ やはり頷かれませんか）

頷く気配のないユリアーネにオイフェは項垂れる。

裏切り者のゲルを頭に浮かべながらオイフェは思考する。

（それに多分、このダンジョンにレオン様は…）

その事を話そうとオイフェはユリアーネに言葉を出す。

「姫」

力なくそう言っで、さらにオイフェは話しを続けようとする。その時、暗闇、それもオイフェ達が逃げてきた方向から足音した。それも複数の足音だ。

「姫、行きましょう」

オイフェは立ち上がり、ユリアーネの手を取り、足音がするその反対の暗闇に静かに進んで行く。

「っ！」

足をもっと早く動かそうとしたオイフェの足に痛みが走る。

（歩くことはできるが、無理な動きはできないか…）

そう思い、オイフェは可能な限りのスピードで、後ろから聞こえる足音から遠ざかるように歩きを早めた。

（なんだこの臭いは…）

聞こえるの足音を背にオイフェらは今だに外には出られず、この暗闇の中をさまよっていた。

警戒しつつ、進んでいるオイフェの周囲にむせるような臭いが立ち籠めている。

歩きながらオイフェは腰の袋から布で出来たハンカチを出し、ユリアーネに渡す。

「どうぞ」

「ご気分が悪くなった場合はすぐにお知らせください」

声を潜めながらそう言っで、オイフェは真つ暗闇をユリアーネと共に突き進んだ。

さらに臭いがきつくなる。嗅いだ事のある臭いだ。それも何度も。
オイフェ達の足音が変化した、それも雨の中で歩くような水が含ま
んだ音。

足元からもこの臭いがする。

（ 血、か ）

歩けば歩くほどその血の臭いがきつくなる。呼吸をするのにも辛
いほどに。

オイフェはユリアーネを横目で見る。少し気分が悪そうだ。だが後
ろから足音が聞こえる、休むわけにはいかない。

（もう少し我慢してもらうしかないか）

そしてようやくその血の池地獄のような場所を抜けて、オイフェ
はホッと一息ついた。

ユリアーネの顔にも少し安心した表情が出た。

（ 姫が表情を表に出すのは珍しい… ）

その様子を見ながら、オイフェ達は先を進む。

前方の暗闇から気配がする。

すぐさま、オイフェはユリアーネを後ろにかばい、左腰の鞘から
剣を抜く。

右腕に力を入れようとすると、が、血を流しすぎたのか、感覚が麻痺
してうまく動かせない。

（ 血は止まったがさつきよりも動かない……これでは姫を抱えて逃
げることができないか ）

息を鋭く吐く。

「 姫 」

「 私から離れませんようお願いします 」

そう言って視線は前の暗闇に、目は鋭く、そして構えた。

暗闇には2つの影が見える。

暗闇になれたオイフェはその2人の姿を確認することができた。

体の細く両腕の長い男、それと前腕から先がない男　ゲルが見える。
「遅かったじゃないですか、オイフェさん」

いつもと変わらない顔で、いや目をぎらつかせながら言葉を出した。

その隣には腕の長い男が何も言わずに、ただ無言でこちらに目を向けている。

相変わらず後ろからはこちらに向かってくる水を含んだ足音が聞こえてくる。

オイフェは静かに呟いた。

「陽動か」

その言葉にゲルはニヤツと笑い、両腕を軽く広げ、声に出した。

「その通り！これもこの俺の作戦です、すべて俺の計算道理に事は運びました！」

得意げにゲルは声を高らかに上げた。

その様子にオイフェは軽く呆れた表情をして声を出す。

「これもって事は、やはりデマか」

「この洞窟はここ1ヶ月程前から何も住んでいないそうです、野生の動物も人も。
いやネズミがいたってことは探せば見つかる

のかな、動物」

オイフェらに指を指し、こう言った。

「そこで最近、この洞窟ではこういった事に利用している人間が増え始めているんです」

話を聞いていたオイフェは視界に2人を入れながら、細い男の動きを警戒して言葉を出した。

「この3日間、何をしていると思えばそういうことか」

その言葉にカチンときたのか、ゲルは顔を険しくし、オイフェに向かって挑発するようにこう話した。

「そんな口が聞けるのは今のうちだ、俺ら3人を相手にこの状況を

どうにかできるなんて思っているんじゃないだろうな？」

それを聞いてオイフェはただ一言。

「ゲル」

「はっ、はい！」

怯えたような声で背筋を伸ばし大きな声で返事した。

「あまり言葉を荒らげるんじゃない、品性を疑われるぞ」

きっぱりとした声でオイフェはゲルに話をした。

「はい！　　ってうつさいな！オイフェ！」

「オイフェ？」

もう一度、大きく返事をした後に相手を呼び捨てにしたゲルだが、それに反応したオイフェはゲルに疑問をぶつけた。

オイフェの声に反応して小さく呟くように言った。

「……オイフェさん」

「おい」

隣の男がゲルに呆れたふうに声を掛ける。

それに慌てたふうにゲルはこう言った。

「じ、時間稼ぎだよ。矢に塗った毒がそろそろ効いてるんじゃないかな」

それを聞いて、先程から動かないオイフェの右腕の感覚を確認する。

（腕が痺れているのは、血の流しすぎではなかったのか）

右足をゆっくりと動かそうとするが、痺れて全く感覚がなかった。乾いた地面を歩く音が後ろから聞こえてくる。

（……マズイ）

そのオイフェの様子を見ていた、両腕の長い男は短剣を構え、呟くように言葉を出す。

「あながち無駄なことではなさそうだな」

「あんまり傷をつけないでくださいよ。この俺の腕をこんなにして

くれたお礼をたっぷりしたいんですから……」

ゲルは自身の左手のあった場所をさすりながら、そう言った

オイフェはゲルの左腕に目を送る。その腕には革で出来た物で覆われて、血は止まっていた。

その視線に気がついたのかその腕を上げてこう言った。

「ロッキンさんに無理やり焼いて、血の流れるのを防がれたんです。すつごく熱かったんですから」

目を再びぎらつかせながらそう言葉を吐いた。

その言葉にオイフェは一瞬体を止め、言葉を出した。

「姫に触れた痴れ者を、切って捨てた。ただそれだけだ」

オイフェのその言葉には今までとは違い、覇気の籠っており、そして話しを続けた。

「ゲル。貴様、姫の首に手をかけて、あまつさえ刃を向けていたな」

目を鷹のように鋭くし、ゲルをただ見る。そんなオイフェの姿にゲルは体をびくつかせる。

さらに隣にいる男を見て、言葉を出す。

「貴様は姫を辱めようとしていたな」

細い体の男は、無言で短剣をオイフェに向ける。そんな2人を視界に入れながら、一息にその言葉を吐いた。

「姫の前に立ち塞がる有象無象全て切る」

そこで一旦区切り、小さく呟くよう静かに言った。

「来い」

その声のすぐ後、後ろから風を切る音を大きく立てながら、勢い良く何か飛んできた。

「姫！」

オイフェはユリアーネを左腕で抱えて、真横に跳んだ。

その勢いでオイフェらは壁に叩きつけられる。それと同時に先程までオイフェらがいた場所に、何か大きなモノが目にも止まらぬ勢いで通り過ぎていった。

「あいたっ！」

ゲルの声が響き、地面を削るような音が聞こえた。

「ぐっ……」

痛む体を起こしながらオイフェは、一度視線をゲル達のいた方向と何か大きなモノが飛んできた暗闇を交互に見て、ユリアーネに話を掛ける。

「平気ですか？ 姫」

壁に当たった衝撃で気絶したのかユリアーネはオイフェに寄りかかり、顔を伏せていた。

そんなユリアーネの揺り起こそうとしたオイフェの耳に足音が入ってきた。

暗闇からだ。その何かが飛んできた暗闇から、足音が聞こえてくる。壁に当たった2人分の衝撃が尾を引いているのか、オイフェは上手く動かない体に鞭をいれ暗闇を睨む。

そんなオイフェの耳に聞き逃すことのできないことが入ってきた。ゲルは上に乗っていたモノを退かしながらこう言った。

「こっれっ！ おっもいな！」

それを退けてようやくそれが何なのかを見る。

「え、あれこれって。 ロッキンさん？」

（ 何？）

その言葉を聞いたオイフェはゲルの方向を向く。

オイフェの目からは、それがロッキンと呼ばれた男なのかどうか、暗闇で確認することは出来ない。

ゲルは慌てるように何かを叫んでいる。

「ヒュロさん！ ヒュロさん！ ロッキンさんが死んでますよ！ ってあれ、ヒュロさんがいない」

足音の近づいてくる暗闇に目を向けた。

無言でまだ感覚のある左腕と左足を使い、ユリアーネを守るように前に出る。

カチカチと何か音がする。

（何だ、この感覚は。とうとう毒が全身を回ったのか？）

歯と歯がぶつかり、カチカチと音を立てている。

オイフェの左手が僅かに震えている。

（体がざわつく、心臓が五月蠅い、何故だ、体の震えが止まらない……！）

その真つ暗な闇から姿を現したモノ、それは右手には黒い槍を携え、左手には黒い布を持ち、瞳には黄緑色の光が宿り、頭から足の先まで全身が血塗れになった男。その男が僅かに笑みを浮かべ、オイフェの眼前に立っていた。

その姿を視認した瞬間、オイフェは剣を地面に落とす、顔はゲルに裏切られ、ユリアーネを人質に取られた時とは比べ物にならない程、表情が絶望に覆われていた。

その男はゆっくりと言葉を吐いた。

「その殺し合い、私も混ぜろ」

第5話（後書き）

少し長めのお話でした、次からはまた普通の長さに戻ります
次の投稿は、明日の夜8時〜10時に行います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6286z/>

始まりはダンジョン(仮)

2011年12月26日20時59分発行